

# 「士郎さんの所蔵品」特集

平成19年10月30日～平成20年3月16日



士郎さん愛蔵の名刀 永正9年(1512) 兼元作

尾崎士郎記念館

## 「土郎さんの所蔵品」特集

土郎さんは、「多くの人を愛し 多くの人に愛され ずばり 真情を吐露する男」と武者小路実篤が語ったように、その人となりは人々から大変好かれるものでした。そして、土郎さんのもとには、自然に多くの人が集まり、様々なものが寄せられました。中でも、室町期の美濃の名工「兼元」作の日本刀や江戸時代末頃の相撲錦絵などは必見です。

今回の特集は、土郎さんの愛用品など所蔵していた品々を紹介します。

### ○ 日本刀 1点

刀銘は、「濃州赤坂住兼元作」(表)「永正九年二月日」(裏)とあり、1512年(室町時代)の作です。「兼元」とは関(岐阜県関市)鍛冶で有名ないわゆる「<sup>せきのまごろく</sup>関孫六」の初代で、その出自は赤坂(岐阜県大垣市)といわれています。土郎さんが所蔵した日本刀は、孫六兼元がまだ、関鍛冶になる前の作と思われます。(最近の研究では関鍛冶である兼元が赤坂に出向し、後に関へ戻ったとする説もあります。※『室町期 美濃刀工の研究』)

この日本刀は、初代兼元最晩年の作と思われ、片手での戦闘用に作られたものです。また、拵(こしらえ: さやや柄、つばなどのつくり)は薩摩拵といわれるもので、江戸時代になってから作られたものと推測されます。

この日本刀は、昭和23年5月9日の長男俵士さんの誕生を記念して、土郎さんのファンの印刷会社社長から贈られたものです。また、昭和38年1月5日消印の横山彰夫氏(刀の愛好家、自動車販売会社社長)に宛てた書簡で、「五月の節句俵士誕生の



日本刀 拵(柄の部分)

日に之を飾り一盞傾けたく存候故よろしく願上候」とこの日本刀のことがふれられています(『尾崎土郎 書簡筆滴』)。土郎さんは、長男俵士さんの誕生日にこの日本刀を飾りながら、お酒を嗜みたかったようです。  
<調書>

長さ 62.6 cm 反り 1.2 cm。鑄造 庵棟。  
(地) 板目、肌立ち流れる。(刃) 互の目

### ○ 相撲錦絵 7点

相撲繁栄溜り入の図 東ノ方猪王山 弘化3年(1846) 縦36cm 横25cm

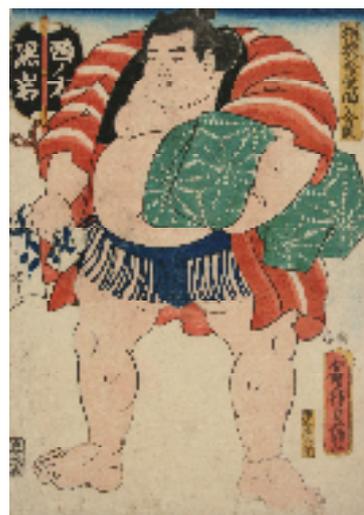
- ・猪王山森右衛門 宮城県桃生郡河北町出身、文化12年生れ  
弘化3年3月新入幕 最高位大関
- ・図は付け人が廻しを締めているところです。
- ・稀代の酒豪で土俵に上がるときはいつも酒気帯びと伝わり、このあたりは土郎さんとよく似ています。

相撲繁栄溜り入の図 西ノ方黒岩 嘉永2年(1849) 縦36cm 横25cm

- ・黒岩重太郎 香川県高松市出身、文化11年生れ  
嘉永2年11月新入幕 最高位前頭筆頭

新版勧進大相撲之図 縦36cm 横25cm 2枚

- ・嘉永7年(1854)11月本場所の開催風景
- ・江戸相撲の本場所は江戸両国回向院で小屋掛けで棧敷さきを設け開催していました。
- ・錦絵は三枚組だが中央部が抜けており恐らく大関同士の小柳と鏡岩の対戦の図と思われませんが実際にはこの場所では対戦していません。
- ・土郎さんは多くの相撲小説を著していますが、小説『雷電』ではこの情景を参考にしたようです。



相撲繁栄溜り入の図

鬼面山小の川取組 縦37cm 横26cm

- ・鬼面山谷五郎は岐阜県養老町出身で明治最初の横綱です。
- ・小野川才助は福岡県久留米市出身で前名虹ヶ嶽。万延2年(1861)2月、小野川と改名。対戦はこの時から慶応2年(1866)3月までで、戦績は鬼面山の4勝2敗3引き分けでした。
- ・土俵上の中改め(審判員)は追手風喜太郎と清見潟又市です。
- ・清見潟は三代目で初代清見潟又蔵が西尾市和気町出身のため毎年墓参を兼ねて三河巡業をしていました。特に三代目清見潟は三河に何度も来ており、多くの証跡が現存します。
- ・清見潟は土郎さんの郷里近辺に関わる力士として関心があったものと思われます。

両国勧進大相撲晴天大当繁昌之図 縦26cm 横38cm

- ・両国橋を渡る力士連中
- ・小説『雷電』を書くための参考資料だったかもしれません。

富嶽三十六景深川万年橋下 縦26cm 横25cm

- ・万年橋から船を眺めている人物は力士でしょうか。
- ・深川には江戸相撲の相撲部屋が存在しました。

小錦朝夕対戦の図 縦37cm 横26cm 2枚



小錦朝夕対戦の図

- ・小錦は横綱、朝夕は大関、控え力士の西ノ海は横綱、千年川は小結になった力士でいずれも左下にいる初代高砂浦五郎の弟子です。
- ・行司の木村誠道は豊橋市出身、高砂部屋所属でのちの木村庄之助です。
- ・明治中期の高砂部屋の繁栄振りを示す図です。

- ・高砂は明治初年に東京大相撲協会に改革を提言し除名された力士で、明治6年愛知県巡業中に脱走し、時の愛知県令に庇護され後に調停により大相撲協会へ復帰し取締役(理事長)まで栄進し、相撲の近代化に努めました。
- ・士郎さんは前田山改め高砂浦五郎(4代目)と親交しており、胸毛の朝潮太郎を後援しました。高砂部屋に関係が深い士郎さんのために、豊橋市出身の元力士小島貞二氏がこれらを士郎さんに寄贈したようです。

**○ アルバム「吉良写真」 1点** (他に「小説新潮」昭和30年8月号 2点)

士郎さんが57歳だった昭和30年(1955)春、同年8月号の雑誌「小説新潮」の巻頭特集の取材で吉良町に帰った際に撮影されたもの。写真は吉良家の菩提寺華蔵寺、吉良の仁吉の墓のある源徳寺、母校の横須賀小学校や生家有縁の地蔵堂などを訪れた際のものや、士郎さんと親交のあった料理旅館「喜廻栄」の女将(お永さん)と一緒に三州吉良港を散歩するシーンや相撲の土俵入りを楽しむ姿など120点が収められています。今回は昭和30年の「小説新潮」8月号とともに展示します。

**○ 横綱審議会設立10周年記念楯 1点**

相撲をこよなく愛した士郎さんは昭和25年(1950)5月に新たに設立された横綱審議会の委員に選任されました。率先して相撲熱を上げることに専念した士郎さんにとって、この楯は嬉しい「勲章」でした。

**○ 蔵書 3点**

**川端康成 著『眠れる美女』**

川端康成は、昭和12年(1937)『雪国』で士郎さんの『人生劇場』とともに文芸懇話会賞を受賞しています。以後代表作『伊豆の踊り子』を始め『夕日』『千羽鶴』『眠れる美女』など多くの作品を発表しています。

士郎さんの代表作『人生劇場』は川端康成が絶賛して大ベストセラーとなりました。

**三島由紀夫 著『潮騒』**

昭和29年(1954)、三島由紀夫は『潮騒』で新潮社文学賞を受賞しています。

**井上 靖 著『淀どの日記』**

代表作は『猟銃』『氷壁』『風林火山』『淀どの日記』など

※ 何れも著者献呈直筆署名入りです。

**○ その他の展示作品 11点**

**今東光からの書簡** 昭和38年秋頃、士郎さんの腸癌再発の兆候が見え始めたころの書簡と思われます。

**色紙「欽枕聴」** 谷崎潤一郎 書 中央公論社からの寄贈品

**士郎さんの愛用品** (財布、置時計、判子、扇子、大風呂敷、ベレー帽、ネクタイ、コート)

計 25点展示しています



三島由紀夫献呈署名